

# 聴覚障害児における動詞の意味理解と使用傾向

一文完成課題と動詞マッチング課題による検討一

○林田 真志

(広島大学大学院教育学研究科)

KEY WORDS: 聴覚障害児, 文完成, 動詞マッチング

## I. 目的

聴覚障害児における動詞の使用傾向に関して、包括動詞（汎用的な意味をもつ動詞）と比較して限定動詞（動作の様態や方法を限定する意味をもつ動詞）の産出が困難である傾向が報告されている（左藤・四日市, 2004）。本研究では、先行研究における包括動詞と限定動詞の視点をふまえながら、2種の課題における回答傾向の分析をとおして、聴覚障害児における動詞の意味理解と使用傾向について検討することを目的とした。

## II. 方法

1. 対象児：X 県内の特別支援学校 3 校の小学部に在籍する中・高学年の児童 15 名（3 年生：2 名，4 年生：3 名，5 年生：8 名，6 年生：2 名）。良聴耳裸耳平均聴力レベルの平均値は 94.9dBHL ( $SD=17.6$ )，補聴器・人工内耳装用下での良聴耳平均聴力レベルの平均値は 36.5dBHL ( $SD=10.0$ ) であった。全国標準 Reading-Test の読書学年は、小学校 1 年生 2~3 学期以下から小学校 6 年生 1~2 学期の範囲であった。2. 課題内容：小学校高学年までに獲得される動詞群をもとに、大学（院）生 43 名を対象とした予備調査において、80%以上の対象者が意味的に類似すると回答した包括動詞と限定動詞 14 対を課題語とした（Table 1）。これらの課題語を用い、文完成課題（動詞が入るべき箇所が空欄になった課題文に対し、文意が通るように語群の中から適切な限定動詞を選択する課題）と、動詞マッチング課題（単独で提示された包括動詞と類似した意味をもつ限定動詞を語群の中から選択する課題）を実施した。両課題ともに、選択する限定動詞の個数に制限は設けなかった。なお、課題文中にその意味を知らない語があった場合は、当該語に下線を引くよう教示した。3. 分析方法：①課題語ごとの正答率、②各対象児の個人内要因と正答率の間の関連性、③回答の間に見られる正誤のパターン、について分析を行った。

包括動詞	限定動詞
入れる	そそぐ
取る	摘む
壊れる	くずれる
座る	腰掛ける
切る	刻む
言う	つぶやく
行く	向かう
見る	みつめる
鳴く	さえずる
洗う	すすぐ
乗る	またがる
食べる	かじる
着る	はおる
鳴る	響く

## III. 結果及び考察

両課題における正答率の平均値及び標準偏差を Fig. 1 に示した。Fig. 1 より、文完成課題における正答率の平均値は 86.7% ( $SD=21.9$ )，動詞マッチング課題におけるそれも 86.7% ( $SD=19.3$ ) と高い値を示した。左藤・四日市 (2004) による動詞の産出課題においては、健聴児と比較して限定動詞が産出されにくい傾向が認められている。だが、本研究では選択肢をもとに回答を求める課題を採用したためか、文意に合う限定動詞を選択したり、包括動詞と限定動詞の意味的類似性を判断したりすることにおいて、高い成績を示す児童が多くみられた。このことは、自身の学習経験等をもとに、限定動詞の意味を推測できる対象児が多いことを示していると考えられる。なお、各対象児の良聴耳裸耳

平均聴力レベルと各課題における正答率の間、ならびに、補聴器・人工内耳装用下での良聴耳平均聴力レベルと各課題における正答率の間で Spearman の順位相関係数を算出したところ、有意な相関は認められなかった。また、各対象児の実学年や読書学年と各課題における正答率の間にも、一定の傾向は認められなかった。

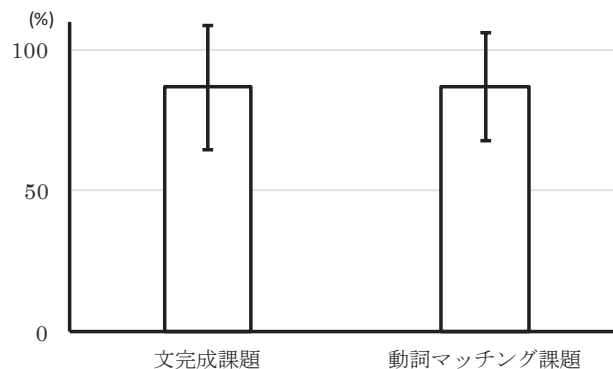


Fig. 1 課題における正答率の平均値及び標準偏差

文完成課題において最も誤答が多かった語は「腰掛ける」であり、5 名中 3 名が「向かう」と回答した。その要因として、「向かう」を選択しても、課題文（「二人で公園のベンチに（ ）。」）が日本語表現として許容されてしまうことがあげられる。「ベンチ」という語の理解が困難な対象児はいなかったこと、そして、動詞マッチング課題において「座るー腰掛ける」の正答率は 100%であったことをふまえると、文完成課題において「公園のベンチ（のある場所）に向かっていく。」という場面を想起した対象児もいたと推測される。あるいは、「ベンチ」と「腰掛ける」という 2 つの語の間に共起性を見出しにくかった可能性もあげられる。

動詞マッチング課題において最も誤答が多かった語は「鳴く」であり、6 名中 4 名が「響く」と回答した。次に誤答が多かった語は「鳴る」であり、5 名中 4 名が「さえずる」と回答した。その要因として、「鳴く」と「鳴る」の表記が類似しているため、限定動詞「さえずる」が「鳴く」または「鳴る」のどちらと意味的に類似するかを判別できなかった対象児がいた可能性が考えられる。しかし、文完成課題においては、「さえずる」の正答率は 80.0%、「響く」の正答率は 93.3%と比較的高い値を示した。したがって、包括動詞「鳴く」「鳴る」と限定動詞「さえずる」「響く」の関係性において、文脈情報をもとに適切に選択することは容易であるが、動詞単体では意味の混同が生じやすく、関連づけが適切に行われにくい可能性が示唆された。

今後の課題としては、全国標準 Reading-Test における各下位検査の結果と課題成績の間の関連性の検討、ならびに、1 つの包括動詞に対応する複数の限定動詞の使い分けに関する分析などがあげられる。

## 文献

左藤敦子・四日市章 (2004) 難聴児における動詞の産出傾向一文脈による意味の限定の観点から一。特殊教育学研究, 41, 455-464. (HAYASHIDA Masashi)